博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	山田　磯夫
論　文　題　目	美術館展示教育に関する研究

山田磯夫氏の博士学位請求論文『美術館展示教育に関する研究』は、美術館の展示教育に関するものとしてはわが国初の研究である。展示は美術館活動におけるもっとも重要な機能の一つであるが、従来学芸員を養成する立場からの展示論もしくは展示教育に関する研究はほとんどなかった。したがって、山田氏の本論文はきわめて斬新、かつ意欲的な研究と言えよう。

本論文は序章と第一部、第二部から構成されている。まず序章では「日本博物館前史」と題し、明治時代に近代ヨーロッパの博物館思想が齎らされる以前のわが国に存在していた博物館の機能について検討する。古くは奈良時代の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』により、天平期の法隆寺金堂内の仏像の展示、また『国家珍宝帳』によって東大寺正倉院献納宝物の収集と保管について考察する。さらに江戸時代の展示について新見解を述べる。従来ほとんど知られていなかった『泉涌寺霊宝拝見図』と『嵯峨霊仏開帳志』を見出し、江戸時代の出開帳が現代の美術館の展示と比較しても遜色のない展示であったことを指摘する。

第一部は「展覧会および展示教育の研究」で、六章から構成されている。学芸員養成講座において、教員が学生に対して展示をどのように教育していくかについて論ずる。

第一章「博物館施設の見学」は、学芸員養成の教育でもっとも重要なものとして見学実習を取り上げる。博物館見学で学ぶべきテーマは博物館の概要、収集・保管、調査・研究、展示活動、教育活動等であり、さらに見学すべきは建物と環境、展示室、公開施設と非公開施設のバックヤードを上げる。学生にとって博物館施設の特徴や構造を学ぶ経験が博物館学理解の基礎となることを強調する。

つぎに第二章「展覧会企画と展示平面図の作成」では、学芸員養成のために展覧会企画の立案をより現実感のある体験にするための方法について提言する。展覧会企画とは実際に展覧会を開催できるレベルのオリジナルの最終案を想定したもの。すなわち、展覧会タイトル、コーナー割り、あいさつ文などを記した企画案、また作品名・寸法・所蔵者の記述、借用と展示可能な作品リスト、さらに 1/50 スケールの平面図に作品、展示ケース、動線、照明等を描いた展示平面図等の作成を学生に課し、教員は提出されたものを採点、返却し、講評する。学生は展覧会づくりの工程において、企画案作成、作品リスト作成、展示平面図作成を通して模擬的ではあっても現実感のある展示ができると主張する。

第三章「美術館展示計画と展示設計図」は、第二章と異なり、学生たちに展示計画だけを考えさせる方法を提言する。展覧会会場の一展示室だけの展示を担当するもので、縮小写真を用いる。すなわち 1/50 の平面図と立面図に、1/50 の作品の縮小写真を貼付することにより、企画案がなくともより平易に、かつ具体的に作品展示を経験できると言う。

第四章「展覧会企画のプレゼンテーション」は、パソコンを用いて展覧会企画のプレゼンテーションをするための方法を提言する。学生が展覧会企画を立案し、企画書・作品リスト・展示設計図を作成し、プレゼンテーションソフトを用いてパソコンに取り込む。その結果、学生はパソコン操作とプレゼンテーション技法を学ぶことができるのである。

第五章「仮想展覧会の開催」では、仮想展覧会と称して、学生が美術館の学芸員と同じく展覧会企画・作品リスト・展示平面図に加え、図録・チラシ・ポスターの作成までの展覧会すべてを実体験する方法について提言する。学芸員がつくる展覧会と異なるのは作品がレプリカであることだが、学生たちは展覧会のつくり手の視点を知ることができるのである。

第六章「博物館実習における展示について」では、カリキュラム構成の中で展示実習を後半に設定し、展示理論・照明・展示計画・作品の取り扱い等の展示のために必要な知識と技術を事前に身につけさせ、これらが

展示実習に集約されるように位置づける。内容は掃除に始まり、資料の選定、展示、全体のバランス調整、キャプションの設置、撤収、講評等。これらを経験することによって、展示法を学び、展示の難しさを知ることができると言う。

つぎに第二部は「展示形態と展示意図の研究」をテーマに、四章から構成されている。

第一章「博物館における展示形態の再検討」は、博物館の展示形態として従来、説示型展示・提示型展示・教育型展示が上げられてきたが、これらと展示意図との関係について考察する。説示型と提示型は新井重三氏によると展示の意図による分類とされ、青木豊氏によると資料の基本的性格による分類とされたが、山田氏は後者が成立しないことを論証し、前者を再評価する。また、教育型は子供向けの展示形態ではなく、成人も含めた展示形態として定義するが、当然であろう。

第二章「美術館の展示意図Ⅰ」と第三章「美術館の展示意図Ⅱ」は、いわゆる巡回展が施設の構造や美術館の方針によって展示は変わり、展示室の形状が展示に大きな影響を与えていることを指摘する。各館の展示を実地調査し、各館が同じ展示意図を共有しているわけではないことを明らかにする。本章は美術館の学芸員の展示意図研究に大いに寄与すると思われる。

第四章「展示意図への提言」は展覧会の展示から展示意図を読み取る方法について提言する。すなわち、展示意図は展示シナリオ、作品の色や形などの性格、作品間の大きさや形などのバランスと見栄え、学芸員の感性等によって、また展示室の制約や各館の方針・事情によって形づくられる。学生は展示室の形状、作品リストの記載順、キャプションの位置とデザイン、さらに重要作品の配置、壁面と展示などから展示意図を理解するよう指摘する。したがって、学生は授業から離れても個人で展示意図を理解することができ、展示における種々のノウハウを蓄積し、学芸員に向けて展示の研究をつづけることが可能なことを主張する。

以上のように山田氏は、学芸員養成講座における博物館展示論と博物館実習の二科目に注目し、一貫して展示に焦点を当て、展示の教育法について検討した研究成果は大なるものであると認め、博士（文学）の学位に相当するものであると判断する。

以上

公開審査会開催日	2012 年 11 月 17 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏　名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）　早稲田大学	大橋　一章
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）　早稲田大学	海老澤　衷
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）　早稲田大学	内田　啓一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）　早稲田大学	川尻　秋生
審査委員	大東文化大学・准教授	博士（学術）　新潟大学	宮瀧　交二